

あきざわ ゆきあつ

ヒーローズ エデュテイメント 会長 秋沢 志篤氏 ③

わが道

わが友

私にも心を通わせ合える、各界で活躍するヒーローと呼ばれる人々がいる。その中で最初に出会ったと思える方は「POP(ポップ)吉村」と吉村秀雄さん(故人)だ。

元ライダーの吉村さんは、当時、すでに二輪車・四輪車用部品メーカーのヨシムラジャパンを創業するとともに、鈴鹿8時間耐久ロードレースに参戦するチームのオーナーだった。

私が共同石油(現ジャパンエナジー)で、系列ガソリンスタンドの経営体質や販売力の強化を担当する課長を務め

ていた昭和60年ごろのこと。当時、東京・虎ノ門にあった共石の本社を吉村さんが訪ねてこられた。

課員が面会すると「レース用のガソリンを開発してほしい」と言う。当時、レースに関心のなかった私には、吉村さんは「知らないおじさん」だったので、課員にお断りするよう指示した。

だが、吉村さんが立ち上がった瞬間、なぜか「待てよ」という思いが持ち上がった。課員に行き先を尋ねさせると、ライバル会社へ行くという。特殊な燃料の開発で石油会社が競い合っている時期だったこともあり、それを聞いて私は「いっぺんやってみるか」という気になった。

その結果、共石は「ポーン



POP吉村こと吉村秀雄氏

・トウ・ラン(走るために生まれた)」というキャッチフレーズのハイオクガソリンを開発・発売。同時に、鈴鹿8耐でヨシムラのスポンサーになった。日本の石油会社がオートバイレースを宣伝に利用してガソリンを売る初めてのケースだった。

鈴鹿サーキット(三重県鈴鹿市)の観客席の階段を、ホンダ創業者の本田宗一郎さんと肩を並べて歩く吉村さんの姿が忘れられない。周囲から歓声が上がるのが、そのほとんどが天下のホンダに一匹おおかみで挑む吉村さんへの声援だった。

その後、私は「世界一速い」ガソリンをアピールするため、当時、陸上の100mで世界一だったカナダのベン・ジョンソンさんを宣伝に起用した。

こうした仕事は本来、広告宣伝部の担当だが、私は仕事に熱中するあまり、他部署の領域に越境していつてしまふ。それを会社も同僚も認めてくれた。

コンビニエンスストア「am/pm」事業を起してからも、宣伝に起用するヒーローを選ぶ際、代理店に丸投げすることはせず、すべてヒーローの方々に直接会って本人をお願いしてきた。初めて会ったときに感じるテイスト

で、共鳴・共感を得られた人と仕事をしてきた。その結果、「おもいの輪」が広がってきた。

挑戦する喜び ヒーローから学ぶ

分て研磨し、自分の耳でエンジン音をチェックしていた。その姿は、チャレンジャーの喜び、創造する喜びを伝えてく